



そろそろ庭のシデコブシの花芽がふくらんできました。2020年という年は、きつと世界史に刻まれますね。まだまだ終息には遠いようですが、「八ヶ岳歩こう会」も昨年は半年ほどお休み、秋から少しずつ再開しました。そして9月から12月に歩いたのが今号の武田勝頼エレジーの道です。偶然ですが、昨年やはり歩こう会の中山道ウォークで鳥居峠を歩きました。1582年の1月に、ここで武田軍が大敗、3月には新府城から敗走やたった2ヶ月の間の激動の歴史を辿って歩いたのでした。

勝頼エレジーの道

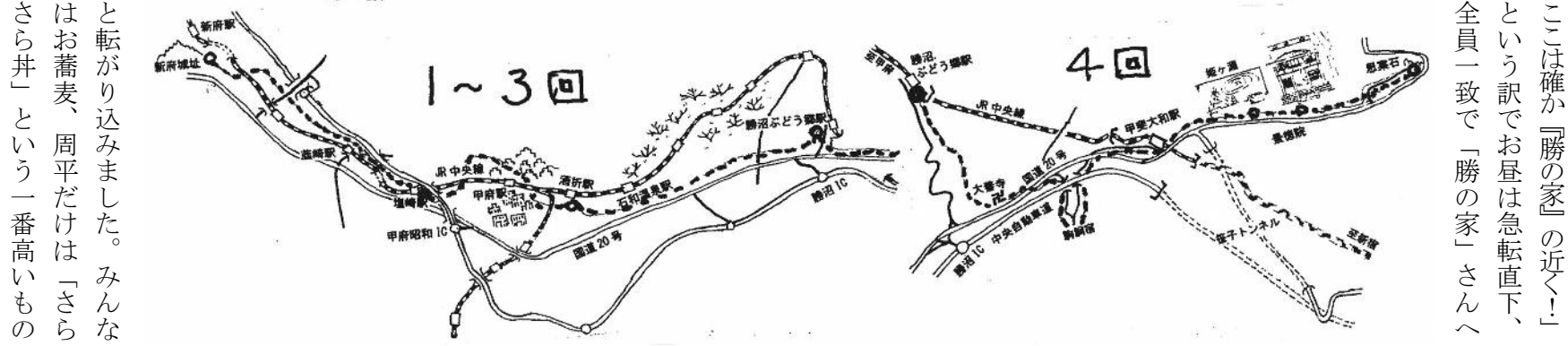
甲斐の国の一五八二年

第1回 新府城址から

武田家最後の当主・勝頼が織田・徳川連合軍に敗れ新府城から岩殿城へ向かって敗走する跡を辿る「勝頼エレジーの道」と名付けられた全4回

のウォーク。全長約60キロ。下見は真夏の猛暑口でした。新府城址下の駐車場からスタート。七里岩ラインを横断して左手に新府城址を見上げながら裏手の乾門跡Ⅱ搦手から城址に入りました。乾門一帯は案内板や本丸に続く道が整備されていて、10数分で本跡の広場に出ました。広場の北側は以前は松や檜、樺などの樹木の森でしたが、かなり伐採され、新府の桃畑から遠く八ヶ岳が眺望できる見晴台になっています。新府城は、勝頼が武田家の家老だった真田昌幸に命じて築城させたもの。しかしわずか68日で織田・徳川の攻勢に迫られ、逃げる前に焼き払った武田家最後の城です。桜に囲まれた

本丸跡の広場には勝頼を祀った藤武神社と神楽殿があり、毎年、四月には盛大なお祭りが行われます。この新府城へは私たちが登ってきた乾門から登る道、七里岩ラインから直登する急階段の道、南側を回る車道があります。本番ではこの車道の途中から右側開けた広場のような所に入っていきます。「あれっ？どこへ？」と思っていたら、葎崎に住んでいるTさんが「自分の散歩道です」と車道と平行する里の道を案内してくれました。1キロ程で七里岩ラインに合流すると光明寺。ここには家臣・木曾義昌が織田側に寝返ったため、人質だった義昌の母子・が処刑されその菩提を弔う墓が建てられています。この先、七里岩ラインから左折したところにある踊躍原（おどりがはら）が処刑された場所でした。さらさら井パワー！



そこからは七里岩台地の下を流れる塩川を越えて進むと涙の森。ここは逃れていく際、燃え上がる新府城を眺めて勝頼夫人が涙を流したと伝えられる場所で、夫人が詠んだ歌碑が建っていました。当初ここでお昼の予定でしたが、以前、この辺りのお店で食事をしたことを思い出し、「あれ、と転がり込みました。みんなはお蕎麦、周平だけは「さらさら井」という一番高いものを注文。小洒落た小皿が3、4品ついてご飯に鶏肉を香ばしく焼いてそぎ切りにした丼！出て来るやかぶりつく周平、しばらくして添えてある急須に気が付き「あれっ？これは？」と尋ねると「出し汁です。井にかけて食べるんです」なるほどお茶漬けのようにサラサラとかきこみ「美味い！」暑さでバテて途中リタイアと弱音を吐いていた周平は元氣百倍！そのおかげで？午後

の部も、回看塚（みかえりづか）を通り、塩崎駅まで歩き通すことができました。第2回 泣き石と法泉寺 塩崎駅から中央線の南側沿いの路地を進むと10分程で国道20号との交差点。その脇に、焼け落ちる新府城を振り返り勝頼夫人が涙してから水が滴り落ちるようになったと言いつた「泣き石」があります。ここから中央道を潜って県道を進み、甲府市に入ると左手にある緑ヶ丘スポーツ公園でお昼です。公園を出発してまもなく法泉寺。ここは戦に敗れ、京都でさらされた勝頼の首を和尚が持ち帰り弔ったことで勝頼の菩提寺となりました。この先、一行が唯一の休息を取ったところと言われる甲府の一条信龍屋敷跡へ。今はコンビニの駐車場となっていて、看板があるだけ。甲府駅脇を通り、市街地を抜けて酒折駅がゴール。第3回 ひたすら歩く 酒折駅から勝沼ブドウ郷駅まで。この間は一行の足跡として残るものはほとんど無いように、おそらく甲州街道を通ったのだろうと推測。日川沿いの道から20号に出て少し進むと道路沿いに白百合醸造。交通量の多い国道を歩き続け疲れが溜まってきた私たちが待ち受けていたのがゴールの勝沼ブドウ郷駅に向かう最後の登りでした！周りには一面ぶどう畑、赤や黄に紅葉したブドウの葉がパッチワークのようにきれいです。と味わう余裕もなく汗を流しながらやと到着。第4回 大善寺と景徳院 最終回は12月末の真冬日。勝沼ブドウ郷駅は高台にあって、駅舎を出てすぐ左に入り、大善寺へ向かう道標に従ってブドウ畑の中を進みます。大善寺は奈良時代開創、仏像の3体が手にブドウの実を持っていてるところから別名「ブドウ寺」と呼ばれています。勝頼一行は、一日で40キロの道を歩いて、ここで一夜を過ごしたと、信玄の従姉 くらへつづく

表からつづく

理慶尼が記しています。

大善寺を出ると、途中、国道沿いに「鞍掛」「血洗沢」などの標識があり、敗走して

いくときの様子が偲ばれます。1時間ほどで駒飼宿、黒野田宿への分岐に出ました。この

分岐は駒飼宿を経て笹子峠越えに至る道筋です。一行が目

指した岩殿城は、城主の小山田信茂が織田側に寝返り入城

を阻んだため、数日留らざるを得なかった地です。民家の

裏庭に追ってくる織田軍勢の様子を偵察しようと勝頼が出

向き座ったといわれる「腰掛石」が残されています。

駒飼宿からしばらく歩くと甲斐大和駅。駅の向かいの公園には勝頼の銅像が建っています。ここで昼食休憩。

さて、いよいよ道は日川沿いの山の奥に入っていきます。四郎作古戦場、鳥井畑古戦場と続き、景德院へ向かいます。その手前の姫が淵には勝頼夫人と殉死した16人の侍女の碑が建っていました。そこは駐車場になっていてその向かいが景德院です。小さな鳥居をくぐり、石段を登っていくと境内の一角に出ました。

勝頼と勝頼夫人、長男信勝の墓にお参りし、「勝頼エレ

ジーの道」はここでゴールです。ここからは、甲斐大和駅まで戻る組とさらに奥まで行く組に分かれました。

実際は勝頼達はさらに奥に進み、追撃してくる織田軍と、前から迫る滝川一益の軍勢に進退窮まり、諦めて戻ってこの境内で自害したとのこと。

その戻る決心をした「思案石」まで「行きたい人は？」とリーダーが募りました。下見の時に疲れ果てて、皆が思案石を往復してくるのを手前の釣り堀で待っていた周平は「本番では是非とも思案石まで行きたい」と真つ先に挙手。

景德院境内をぬけ、さらに登りの道をしばらく進むと下見の時にリタイアした釣り堀のレストハウスが見えてきました。その前に架かっている橋を渡り、登りの道に入ってもまもなく前方に思案石の標識が見えてきました。

「なんだッ!!こんなに近かったのか!」急に強気!! 帰路は下り坂、甲斐大和駅まで軽やかに? 歩く周平でした。

最初は600人を超えると

言われる従者が最後は40人ほどになっていったそうです。

死を覚悟しながら歩いたであろう人々に思いを馳せ、のんきに歩ける世の中がずっと続くよう願わずにはいられませんでした。

渡嘉敷先生の 歩く植物図鑑 No.53 シモバシラ



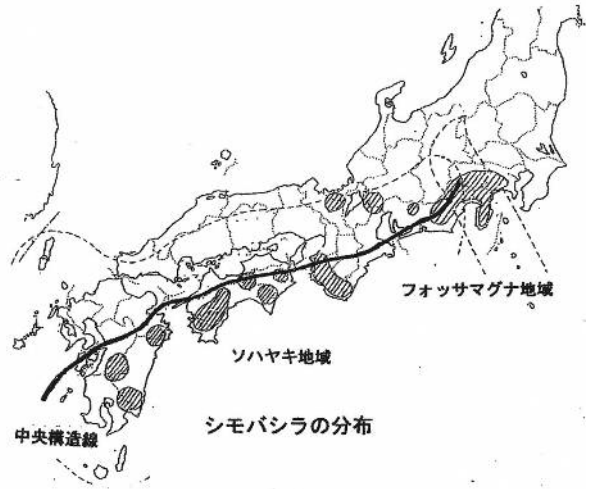
シソ科の多年草で草丈40〜70cmになり、9月〜10月に上方の葉液から花穂を出し、白色の花が一方を向いて総状に集って咲く。茎は4角形で下部は根茎と共に木質で硬い。冬季には枯れた茎の中を水分が毛細管現象で強く上昇し、茎の裂け目から漏れ出して凍り、霜柱のような氷柱(氷花、氷華)が出来る。シモバシラに大きな氷花が出来るのは、茎は枯れても根は活発に水分を吸い上げる機能を保持しているからである。また枯れた茎の導管も水分の上昇に適した太さが備わっているからである。※1 因みに最も大きな氷華の見られるのは、初冬厳寒の朝である。氷華を繰り返すと、茎の組織が崩されて水分の上昇が鈍くなり、徐々に氷華は小さくなる。この面白い氷華が見られることからユキヨセソウの名もある。

シモバシラほどに仕組みの備わっている多年性草本は他にはなく、それだけにシモバシラの氷の華は大きくて美しく眼を惹く。草本の中にはシ

モバシラに見られるような大きな氷華には到底及ばないまでも、氷の結晶ができるものが他にも見られる。※2

本種は関東地以西(埼玉以西)の太平洋側、四国、九州に分布し、おもに温帯の山地に自生している。日本の固有種で、シモバシラ属は僅かに2種しかなく、他の1種は中国に分布している。

このような分布から見て、シモバシラは典型的な「ソハヤキ要素」と考えられ、分布地理学上の価値も高い。※3



※2 氷華の見られる草本
キク科・ヤナギバヒマワリ、カシワバハグマ、モミジガサ、アズマヤマアザミ

シソ科・セキヤノアキチヨウジ、カメバヒキオコシ、タイリンヤマハッカ、サルビア

サクランソウ科 オカトラノオヒユ科・イノコズチ
タデ科・ミズヒキ

※3 ソバヤキ要素(襲速紀要素)
襲速紀の意味する地域は、九州(熊襲の国:熊本県、鹿児島県)、四国の瀬戸内海側(速水の瀬戸:豊後水道)、和歌山県と三重県の南部(紀伊の国)から赤石山脈に連なる中央構造線を中心とし、フォッサマグナ地域に接する。

この地域は豊富なフロラが発堤し、その多くの植物は中国大陸の南西部に近縁種がある。中国大陸のその近縁種は分布を漸



※1 毛細管現象
水分が他の水平面より高くなり、または低くなる現象で、管中の液面上昇または降下の度合いは液の表面張力に比例し、管の内径に反比例する。シモバシラの導管の内径は太からず細く、水分の上昇にほどよい太さなのであろう。

次東方に広げて、まだ支那海がなく中国大陸と九州が地続きであった時代に九州にまで到達し、さらに東進して日本列島の温帯に残ったものと考えられている。

★・★・★・★・★・★・★・★ ス・ペ・イ・の・巡・礼・北・の・道 ゲルニカから再出発

さて、次の日から8キロ先のアルベルゲを目指して再出発。やはり暑い・途中、庭先で売っていたスイカを購入。最高♪ しかし、またしてもアルベルゲ見当たらず・・・道は森の中へ。周平の体調も心配になりかけた頃、やっと舗装道路に出て、しばらく行つたところのT字路にチョークで書かれた矢印と「アルベルゲ280m」の文字。良かった♪ 受付までまだ1時間近くありますが、ともかく門前で休憩。少し経つとセニョールが出てきて、「泊まりたいのか」「シー、シー」大きく頷く二人。泊めてもらえそう♪

しかしここは一軒宿、近くにレストランはもちろん、お店もありません。食事はどうしよう?と思っていたら、食材を売ってくれるようです。パスタとトマト・玉ねぎなど。外には調理場。となれば周平のコック魂に火がメラメラ!(つづく)